

老人力と老健力

高齢社会の中のパートナーシップ
〈人と人、力と力、無限の可能性を信じて〉



日程集



第21回

全国介護老人保健施設大会

岡山

会期 2010年11月10日(水)~12日(金)

メイン会場 ホテルグランヴィア岡山

大会会長 福嶋 啓祐

大会副会長 野上 和加博

実行委員長 渡辺 清一郎

主催 社団法人 全国老人保健施設協会

大会HP <http://www.convention-w.jp/roken2010>

平成22年11月11日(木) 15:35~16:30 Q 岡山コンベンションセンター 4F 407会議室
排泄3 [座長] 梶西 智宏

第1群:101 入所

第2群:203 一般的検討(意義・必要性・変化・効果・比較)

第3群:332 排泄 排泄の自立

膀胱内尿量測定器を活用したカテーテル抜去の取り組み

介護老人保険施設 ゆうとびあ

山下 剛志、花房 幸雄、岡田 修治、三島 輝樹、小徳 美千子、中下 英之助、森本 靖子、小田 貢

抄録要旨:在宅復帰をする上で家族にとって排泄障害が問題になることがある。自然な排泄ができることが、在宅復帰につながると思われ、膀胱内尿量測定器を使用した尿道留置カテーテル抜去の取り組みを行なったので報告する。

はじめに 老人保健施設の役割でもある在宅復帰に向けて取り組む中で、利用者と家族にとって排泄障害が問題となることがある。中でも尿道留置カテーテルは尿路感染、カテーテル交換など専門的管理が必要であり、在宅復帰への大きな妨げになっている。尿道留置カテーテルを抜去し自然な排泄ができることが、在宅復帰につながるのではないかと考え、膀胱内尿量測定器(タケシバ電機製)を使用した尿道留置カテーテル抜去の取り組みを行ったので報告する。

研究方法 1、研究期間 平成22年3月19日~平成22年6月30日2、尿道留置カテーテルを留置しているリスクと尿道留置カテーテル抜去の目的、方法、リスクを家族に説明し、同意を得る。3、尿道留置カテーテルを抜去する。4、尿道留置カテーテル抜去後、2時間毎に自然排尿の確認を24時間行う。5、自然排尿があれば膀胱内尿量測定器(タケシバ電機製)で残尿量確認を行う。6、残尿量が少なければ尿道留置カテーテルから離脱し自然排尿へ。

事例紹介 事例1 A氏 91歳 女性 要介護度4 日常生活認知度Ⅱb 日常生活自立度C1 病歴:腰椎多発性圧迫骨折、食思低下入所経緯:平成21年11月 脱水、低栄養状態によりA病院に入院し排尿困難にて尿道留置カテーテル挿入。平成22年1月 低栄養症状は改善されたが排尿困難は続いていた為、尿道カテーテル留置のままリハビリテーション目的で老人保健施設ゆうとびあへ入所となる。入所後:日中は歩行器を使用し「管が邪魔でいけませんわ」と普段から言っておられた。尿道留置カテーテルが挿入されていることで陰部痛がありリハビリテーション、レクリエーションを拒否されることがあり、食事以外は居室で休まれていることが多かった。事例2 B氏 92歳 女性 要介護度 5 日常生活認知度Ⅲb 日常生活自立度C2 病歴:左大腿部頸部骨折、心不全入所経緯:平成22年2月 左大腿部頸部骨折にて、A入院しOP施行。OP後安静目的で尿道留置カテーテル挿入する。リハビリ目的でB病院に転院したが経口摂取困難の為、胃ろう造設目的でC病院に入院。入院中尿路感染症を起こす。平成22年5月 リハビリ目的で老人保健施設ゆうとびあへ入所。入所後:入所後も尿路感染が続いており微熱もあった為、居室で過ごす事が多く離床は週2回の入浴時のみだった。発語もほとんど無く、話しかけると目を動かしたり、わずかに反応していた。

結果 事例1 A氏平成22年3月19日、文書を用いて家族、本人の同意を得て尿道留置カテーテル抜去。抜去後、24時間の残尿量確認を行い、1回の尿量は50~250mlとばらつきがあったが、12回測定したがいずれも膀胱内残尿は少量だった。1日1400mlの排尿量があった。尿意の訴えがあり、問題なく自然排尿となる。尿道留置カテーテルを抜去することで陰部痛が無くなり、リハビリテーションやレクリエーションにも積極的に参加されるようになり、離床時間が長くなった。それに伴いADLも向上し、トイレでの排泄が安定して行えるようになった。本人の笑顔や会話が増え、家族も在宅復帰への意欲が増し自宅へ外出されるようになった。事例2 B氏平成22年5月25日文書を用いて家族、本人の同意を得て尿道留置カテーテル抜去。抜去後、24時間の残尿量確認を行い、1回の尿量は10~250mlとばらつきがあったが、12回測定したがいずれも膀胱内残尿は少量だった。1日1000mlの排尿量があったが尿意はなくパット内に失禁していた。その後も本人から尿意の訴えが無く、トイレでの排泄には至らなかったがパット交換を頻回に行うことで尿路感染が無くなり微熱も解熱し、全身状態が安定し離床機会が増えた。

考察 事例1 A氏は本人より「管がなくなって動きやすくなりましたわ」と言われ、その為尿道留置カテーテルを気にすることなくリハビリテーションを積極的に行い、歩行器移動のたびに尿道留置カテーテルを吊り下げていたストレスからも解消され、ADLの向上に繋がったのではないかとと思われる。その後、トイレでの排泄が安定し日中常時トイレでの排泄が可能になった。又、その様子を見た家族も在宅復帰への意欲が増し自宅へ外出されるようになった。事例2 B氏は尿道留置カテーテル抜去したことにより尿路感染はなくなり本人の状態が安定してきた為、離床回数が1日1回に増えた。尿道留置カテーテルを抜去はできたが理想的な排泄には至らず失禁は続いているがパットを使用することで尿路感染の症状や、発熱がなく全身状態が安定し離床回数が増え、発語や顔の表情が豊かになったのではないかと考える。今後は、家族に在宅復帰への働きかけが必要と考える。

まとめ 以前は尿の貯留状態の確認は医師がエコーで行ったり看護師が観察、導尿していたが、残尿測定器を使用することにより、介護職員でも貯留状態の確認が容易に出来るようになったことで介護職員が排泄に対して積極的になった。今回の取り組みを通して、本人、家族の在宅に帰りたいという思いを支援することができたと同時に、介護職員が達成感を得ることでさらに介護に対して意欲的に取り組む姿勢ができた。

平成22年11月12日(金) 10:20~11:15 Q 岡山コンベンションセンター 4F 407会議室
排泄8 [座長] 房原 紀子

第1群:101 入所
第2群:202 症例・事例による貴重な意見
第3群:335 排泄 その他の排泄ケア関連

拘縮のある利用者のトイレ排泄への取り組み

介護老人保健施設 いなば幸朋苑
福田 幸、川島 由美子

抄録要旨:拘縮が強く尿意の訴えのない利用者に、長期間尿動態データレコーダを用い排尿リズムが把握できた。トイレ案内時間の見直し、便座に座る時間を10分にすることで、パットを濡らさない排泄ケアに成功したので報告する。

はじめに

拘縮があり、尿意のない利用者に長時間尿動態データレコーダ(ゆりりん)を使用して残尿測定し、排尿リズムを把握した。トイレ案内の時間を見直し、10分間トイレに座る事によりパットを濡らさない排泄ケアをおこなう事ができたので報告する。

目的

利用者の排泄リズムを把握してトイレ案内することによりパット内排尿を少なくする。

事例紹介

A氏 女性 85歳 要介護度:5
障害高齢者の日常生活自立度:B2
認知症高齢者の日常生活自立度:IV 長谷川式簡易知能スケール:測定不能
病名:アルツハイマー型認知症
身体状況:両上肢、両下肢に拘縮あり 尿意、便意なし
身長 155cm 体重50.7kg BMI 21.1
排泄:日中トイレ案内、夜間パット交換

研究方法

- ゆりりんを用い、24時間2時間毎に排泄測定を2日間行い最大膀胱容量を測定し、トイレ案内時間を決める。
- 調査結果をもとに、A氏の排泄リズムに合わせたケアを実施する。

・実施する為の問題点として

- 拘縮がある為、夜間のトイレ案内を1人で行うのは難しい。
- トイレに10分間座るには、便座が硬く長く座れない。

・実施する取り組み

- 夜間のパット交換をトイレ案内に変更する。トイレの近くにベッドを移動する事によって1人でのトイレ案内を可能にする。
- トイレに10分間座る。長く座っても疲れないように便座カバーを使用する。

結果

- 夜間パット交換対応時の数値(トイレ案内していない)
夜間の排尿量が多くパットの濡れた不快な状態で睡眠していた。
最大膀胱容量が370mlと分かった。
(図1参照)
トイレ案内時間を24~1時、4~5時に設定した
夜間トイレ案内実施後の数値をみるとトイレでの排尿量は200~300mlあり、パット内排尿量が殆どなくなった。
(図2参照)
- 日中排尿は、トイレに5分座り排尿はあるが、パットが濡れている事が多かった。

ゆりりんで残尿測定し70~200mlあったことで、10分間トイレに座ることを実施した結果残尿数値は20~120mlとなり、日中もパット内排尿が減少した。

まとめ

1. ゆりりんの数値からトイレ案内の時間を正確に設定でき、夜間もトイレ案内をしたことで 一日通してパットを濡らさない快適な排尿リズムができた。
2. 夜間パットが濡れることがなく心地よい眠りを実現できた。
3. 調査前はパット内が濡れていることで腎部のかぶれがあったが現在では殆ど見られない。

おわりに

最初からトイレ案内は無理と考えるのでアセスメントを重ね、一人ひとりの身体状況に合った排泄ケアをしていく必要があると考える。今後は他の利用者にも実施していきたい。

図 1

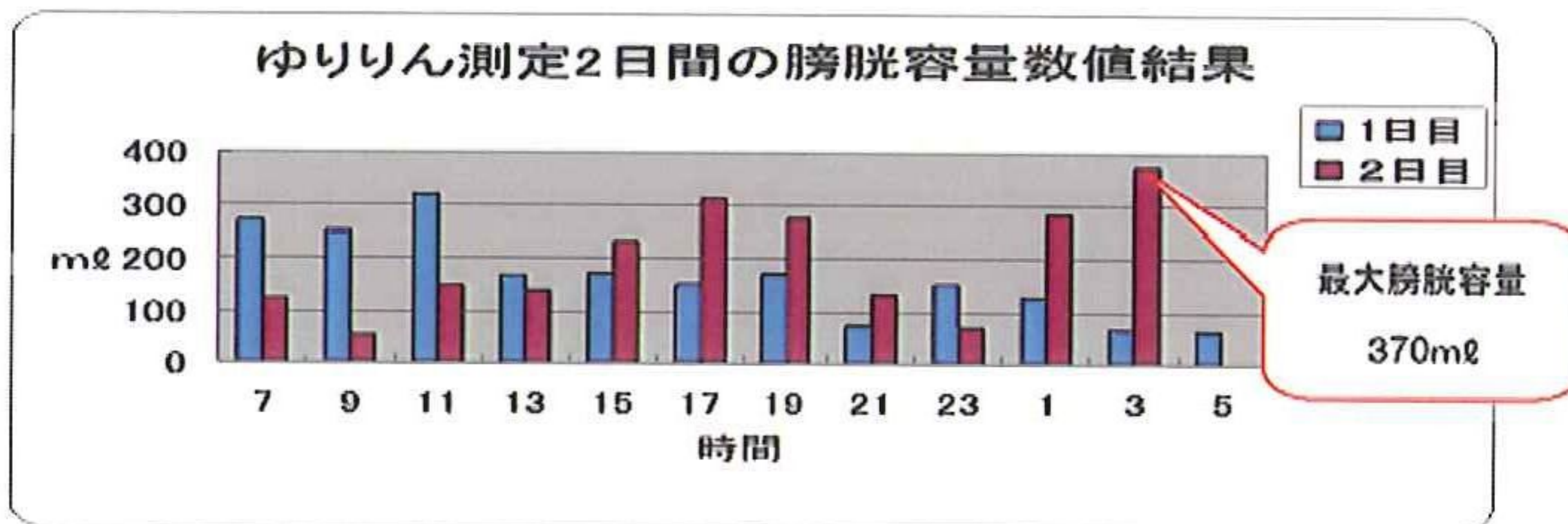


図 2

